
NARUTO 転生して最強のうちはになりました？

Sun

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

NARUTO 転生して最強のうちはになりました？

【コード】

N1700L

【作者名】

Sun

【あらすじ】

神に間違っただけで死んだことにされて、万華鏡状態、失明なし状態、おまけで一つの才能を持った状態でNARUTOのうちは一族に転生しました。

プロローグ

私、神鳴 暁は死んだ。死因は飛行機事故だ。

『すまん』

………死んだはずなのに、目が覚めたら男が土下座してました。

「は？」

話を聞くと老人は神様で私を間違っで殺してしまったとか、理由はかなりくだらなくアニメを徹夜で見て寝不足で仕事をしていて、私は飛行機事故では奇跡的に助かるはずだったのに死んだことにしてしまったとか、

『今後はこんなことがないように魂を連れてくるシステムを自動化したからもう起きん』

………死んだ私には関係ないし、もとからしているよ。

「で、私はどうすればいいんですか？」

『記憶を持って転生していただきたい』

まあ、テンプレだけど、悪くはありませんね。

「場所の指定とかは？」

『すまぬが無理じゃ』

「なぜ？」

神いわく、あくまで記憶を持って転生するだけらしい。

「場所とかは教えてもらえますか？」

『NARUTOのうちは一族じゃ』

おい、まて

「それ、速攻で死にますよね」

『うむ、だから少しは当然優遇させてもらおう』

「具体的には？」

「生まれた時から万華鏡写輪眼開眼、視力も落ちない入れ替えた状態じゃ、あと才能もやろう」

「才能？」

『そうじゃ』

「つまり、『無限の剣制』とか『王の財宝』とかは特典でも無理と

『そうじゃ』

「刀語の七実の才能って出来ますか？」

「出来るぞ、写輪眼と合わせれば忍術、幻術も可能にしておこう、それと元が写輪眼と似ておるから原作で七実が会得していた技など少々サービスしておこう」

「ありがとうございます」

『では、行くのじゃ、本当にすまなかつたな』

「いえ、得した感じでしたし」

いうと、暁は穴に消えていった。

『いったか』

暁は知らない。……本当は飛行機事故で死んでいたことを、

暁は知らない。……自分の死んだ母が時空を超えるほどの稀代の魔術師でこの神に会っていたことを、

暁は知らない。……

『幸せに生きるのじゃぞ。息子よ』

神にあった母が神と愛し合い生まれた子供が自分であったことをそして母を幼いころに亡くして苦労した暁を不憫に思っ転生させたことを、

プロローグ（後書き）

神の息子のあたりはほかにも転生者を出すつもりなので主人公が優遇されてる理由とでも思ってください。

第一話

はじめまして無事転生を果たしたうちはナナミです。今二歳です。容姿はほとんど刀語物語の七実です。理由は一度神から連絡がありわかりました。理由は暁だとこの世界では面倒だと思って変えてくれたそうです。容姿は変えないといけないことを忘れてたからついでに七実にしたそうだ。

あ、髪の毛の色と瞳の色は前世と同じで髪が白銀で瞳が金です。違いはほとんどこれですね。

……まあいんだけど、

ちなみにおかしいですけどうちは一族とは仲が悪いです。理由は簡単私が生まれながらに万華鏡写輪眼を開眼してたから、このことを知ってるのはうちの上部というのだろうか？ まあお偉いさんだけだ。

そうそう開眼の理由、および失明しないなら神なしでも無理やりなら説明できる状態になってる。理由は簡単、母は体が弱く私を妊娠した時点で生む生まない関係なく死ぬことが決定しまった。そのため、生まれてすぐなら最も親しいものは体内にいたため母になるだろうからそのため開眼、失明は母体内にいた時点で別れが決定してたから肉体が作られる時点で失明しないようになった。

……うん、無理がありすぎるけど説明を求められたらそれでもいい。

閑話休題、まあ生まれたときから写輪眼どころか万華鏡だから、鬼才と思われる前に恐れられてる。うちは上部？ 以外は生まれてすぐに写輪眼を開眼した異端の鬼才と思われる。

まあ父は愛した母の忘れ形見だから普通に愛してくれたけど二歳の時に九尾との戦いの傷がもとで亡くなってからはうちはの集落のはずれで一人で暮らしてる。

……まあ、ナルトよりはましだね。うん、

あと、私はいろいろチーとでした。チャクラとかも、

どうも、ナナミです。今三歳なんですけど日課の夜の散歩をしてたら女の子をさらったおっさんに会いました。

……ああ、すっかり忘れてたけど、そんなこともあったね確かヒナタ誘拐か、まあここで助けて日向に貸しを作るのもいいだろう。

「こんばんは、おじさん」

「!?!」

後ろから声をかけるとおじさんがびっくりして振り向いてきた。

「なっ!?!?.....うちのガキかまあいいついでだ」

私のうちのは家紋をみると私も捕まえようとこっちに近づいてきた。

「眠れ」

私は写輪眼で眠らせた。

.....確かこの人忍び頭だったよね? いくら私が写輪眼を開眼してるからってこんな簡単に倒せていいの? 問題だろ大丈夫かねこの人の里、

「ヒナタ!」

私が忍び頭を見ながら考えていると二人の大人がやってきた。

「はじめまして、日向の当主さん」

来たのは日向の当主とその弟だ.....たぶん、

「.....君は」

「はじめまして、うちはナナミと申します」

「君が」

.....まあ知ってるはな、うちの長い歴史でも初めての生まれながらに写輪眼を開眼した異端の鬼才で有名だからね。

「ええ、うちの鬼才です。そうそうその忍びですが殺さないことをお勧めしますよ。殺したらなんだかんたいちゃもんをつけてあなたの遺体を要求してくるでしょうし、生かしておけば木ノ葉が貸しをつくりますから」

「ああ」

「では、散歩の途中ですので失礼します」

言い残すと私は瞬身の術で消えた。

「この忍びは雲隠れの忍び頭でした」

「あれで、ヒナタたちと同じ年か」

「うちの鬼才があれほどとは」

第二話

どうもうちはナナミです。今現在進行形でうちの虐殺が起きてます。

助けないのかつて？ 自分を恐れて遠ざけていた人たちを助けるいわれはありません。それにイタチさんは唯一普通に接してくれましたしね。

そうそう、七実の才能を舐めてた。写輪眼が高まって効率が良くなったのがほとんどかと思っただらとんでもない。

少し話がそれるが、私の万華鏡で開眼した瞳術は右が神炎と左が空門です。命名は私です。

神炎は天照と違い白い炎で永遠に燃えるわけではないのだが、燃え散る速度が異様に速い上にチャクラ消費が天照よりも少ない。なお、炎はチャクラによって増える。

空門は空間を歪めてほかの空間につなげる瞳術です。これがチート過ぎる。チャクラ消費は激しいが敵が攻撃してきたら空門で攻撃が来るところと敵の後ろをつなげれば攻撃が的に変えるわけだから、

では私が開眼した瞳術を説明したところで閑話休題、感づいた人もいるかもしれないですが私はイタチさんの万華鏡使用時を見たことで天照と月詠も使えるようになった。これで神炎と天照の消費の

差がわかったんですが、つまり私はほかの人の写輪眼の瞳術も見れば使えるようになるというわけだ。

「……………チートすぎるね。もしもこの七実の才能が成長とが高まるとかあったら血継限界も使えるようになるかもしれないな。まあさすがにないでしょうけど、」

「どうもイタチさん」

そんなことを家で考えてるとイタチさんがやってきた。

「……………殺されそうになったら殺しますかね」

「……………まあ、瞳術合戦に持ち込んでイタチさんが反動で弱れば倒せるかな？ まあ持ち込めれば逃げはするだろう。七実才能で通常のうちはも真つ青の会得能力を持っていても実戦経験がないからね。過信はしません。油断は死を招く。」

「お仕事ご苦労様でした」

「!?!……………気づいていたのか？」

「ええ、最近一族が不穏な不陰気でしたから、ほとんど隔離状態の私は客観的に見れましたから、そこで考えられるのはクーデター。はつきり言って家の一族は過信してますからね。うちだけで木ノ葉を落とせると思ったんでしょう。まあ落とされなくても大打撃を

受けるので上層部が伊タチさんにはを虐殺しろと命令したって
ところですか？」

「……………そうだ」

「で、私も殺しますか？」

今は伊タチさんが背中にいる状態なんで万華鏡を発動しとく、

「いや、やめておこう。お互い万華鏡を使ったら疲労した俺と温存
していてもとのチャクラ量も多いお前では部が悪い」

「!？ 知ってたんですか？」

「ああ、親父たちがクーデターでお前の万華鏡を使うという案が出
ていたからな」

ああ、なるほどほっとかないよね。クーデターするならこんな戦
力、奪つてもいいわけだし、

「……………ではなぜ来たんです？ 初めに言っておきますけど
一族を殺されたって一族内で親しい人物なんか父が死んでからは伊
タチさんだけなんで復讐なんて言っただけで殺そうと思いませんが、私が
殺そうとする可能性だっただけではないわけではなかったはずですよ」

「サスケを頼みたい」

「サスケ、ですか？」

「ああ、木ノ葉上層部……………三代目に頼んでほかは脅したが万が一

がある」

まあ、イタチさんの頼みだからね。守る気はないけど、

「守る気はないですけど、木ノ葉上層部がサスケに何かしようとしたら次は私かもしれませんからね。その時脅しをかけるくらいならします」

これが妥協点だね。

「すまない」

「お気になさらず」

「ナナミ」

「はい？」

「うちはマダラに気をつける」

イタチはそう言い残すと瞬身の術でナナミのもとから消えた。

第二話（後書き）

さつそくですいませんが意見を募集です。転生者ですがもう一人
うちは一族からですか、出さないかです。一応両方の続きを考えて
はあります。

ご意見よろしく願います。

第三話（前書き）

アンケートありがとうございました。

結果、転生者はなしという方向でいくことに決まりました。

第三話

「うちの虐殺から数日がたった。

周囲からはサスケはうちはイタチも弟は殺せなかったと思われ、私は八歳で写輪眼を開眼させた天才うちはイタチも生まれたときから写輪眼を開眼させた異端の鬼才うちはナナミは殺しきれなかった、と思われている。

（まあ問題は万華鏡までは知らなくても写輪眼を生まれたときから開眼しているのは周知のことだから木ノ葉上層部がどう出るかだよな。ほぼ間違いなく私は最優先暗殺対象になってただろうし、上層部も私を生かす理由はない訳だし、イタチさんも三代目に私のことを頼んだりはしてないだろうから上層部次第だねイタチさんが暗殺しなかったと判断するか、暗殺が失敗したと判断するか、けど私にサスケを頼む前に三代目に頼んだなら気を利かせて「うちはナナミの暗殺は失敗した」とか報告してくれたことを祈ろう）

その後一週間ほど私にとってはほとんどいつも通りの日々が続いた。

まあもともと隔離状態みたいだったから一族が死んでも変わんないんだけど、強いて挙げればイタチさんが来なくなったのと買い物が

面倒になったのと買い物時の視線が気になるぐらいか、

余談だが私はまだアカデミーには通っていない。そんなことよりも忍びの訓練を見ていたほうがいいからだ。

そうそうサスケとはもともと仲がいいわけではないが、てか口もきいたことがないけどおそらく向こうからしたら好きでもないけど嫌いでない感じだったろうが（あったことすら1、2回すれ違ったぐらいだし）今は盛大に嫌われた。

理由は簡単私が復讐？ 何それ？ おいしいの？ てな感じでイタチさんを一切怨んでないからだ。まあサスケに嫌われようが気にしない。約束通り自分に対する木ノ葉上層部の動向を気にするついでにサスケの動向も気にするだけだ。

そんな日々を過ごしていると来客があった。

まあ重要な話ではあったけど長くなるのでまとめて話そう、

なんでもサスケの引き取り人？ まあ保護者代理みたいなのは三代目火影に決まったが私は決まっていらない。ただし引き取りたくないのではなく引き取りたい人が多いそうだ。自分でののはなんだが当然だろう。生まれながらに写輪眼を開眼させた。うちの異端の鬼才。引き取って損はない。徳はあるだろうが、そこで引き取り先がもしこちらがよかったら日向宗家が引き取ると当主からの伝言が来た。下忍になったら出て行ってもかまわないそうだ。

たぶん娘を助けてもらった借りを返す気なのだろう。

（さて、どうするか）

メリットとデメリットを計算しよう。

日向とうちはは仲が良くなかったが私はそんなの気にしない。どちらにも優れた点はある。まあ写輪眼が万華鏡になればうちのほうが強いだろうが、それでも負ける可能性がないわけではない。私は別だが多様すれば視力が下がるのだ。幻術も天照なども目を合わせなければいい白眼なら視線を合わせなくても戦える。白眼で見て直接で無くても幻術にかかる可能性はあるが白眼ならとけるかもしれないし、とりあえず天照などの対策はとれる。まあ須佐能乎は対策できないだろうが、

おっと話がそれましたが閑話休題、メリットは日向なら木ノ葉上層部もそうそう手が出せない。デメリットは……あれ？ 特にない？ 強いて挙げれば自由の時間が減るだろうことだけ？ 宗家の娘を助けたなら日向も敵視はしないだろうし、

そんなわけで私は日向宗家でお世話になることにしました。

第四話（前書き）

本当に申し訳ありませんでした！！

リアルが忙しく更新どころか書くことすらできませんでした。

また、まだ忙しく次の更新は早くとも学校が夏休みにならなければ無理です。すいません。

活動報告は存在自体を忘れてました。活動報告のほうにも載せておきます。

ハナビですが五歳下で同じ班にするのはきついので同い年にします

（この物語では原作からヒナタと双子という設定にします）

第四話

日向宗家でお世話になってそれなりの時が流れた。

原作開始ももうまじかだ。

はつきり言っただけで原作よりも日向はよくなっているだろう。あの事件から兄弟仲が良くなったのかネジにヒアシさんが稽古してたりするし普通に兄弟で笑いながら話してるし、ネジがヒナタを鍛えたりしてるし、

そうそうそれから異名がうちの異端の鬼才から木ノ葉の異端の神童や木ノ葉の異端の鬼才に変わりました。

他里でも通じるらしいです。

理由は簡単刀語で七実が凍空一族の腕力を会得した際に「能力的な腕力だから会得できた」感じなこととその際に「中をいじった」的なことを言っただけだから白眼もやれば会得できるんじゃない？ と思っただけでやってみたら出来てしまっただけでそれが日向の人に知られていっただけで呼ばれるようになった。

ちなみに白眼会得はもとはうちはも日向も源流が同じだからだろうという結論になった。

あと今の実力だが当然のごとくかなり高い。

白眼が使えるようになったことでヒアシさんから日向流体術も習

つたし、さらに虚刀流、原作で七実が会得した技術、万華鏡写輪眼、私が盗み得た忍術など、

そして何より七実の才能の全力、はつきり言っただけで私にできなかった描写が少ないので忘れかけていたが原作で七実が他人の技術を盗んだのは全力を出さなかったためだ。事実七実は七花に殺されたがとがめの髪を一閃してさらに動く途中で限界になりほつといても死んでいただろう。

七実の才能だが初めはどこか借りものという気がしたのだが訓練と時間の影響か今ではそんな感じもなくどこか自分の才能といった感じがする。なんか才能が成長？ した気がするし、具体的には修得率が上がった物によっては一回見れば出来る。しかし全力は使いこなせない。

いやそもそもこれは使いこなせるものなのだろうか？ 私の今の年齢は七実の約半分だが私の肉体は結構鍛えてある。筋肉は着かないけど、少なくとも七実のように病弱ではないから七実よりは頑丈だろう。しかし全力を出したら同じ結果になるとどこか理解してる。まあ七実よりは持つだろうが、

（全力は出せない。あれですね。ハードがソフトをに耐えられない。才能の時は戯言の人類最強とか人類最終とかも考えましたけどこっちで正解でしたね。あれ実験で得たものだったはずですし。

………全力が出せなくても原作登場人物ならマダラという不確定要素以外なら一対一なら実力で上回っている自信はあるけど、問題は経験ですね）

いくら力があるうと経験がなければ負ける場合があるだろう、しかもこの世界本番では負ける〃ほぼ死だ。

(経験を積む、少しの間でも全力をしても死なず、少しの間動けない、寝込むのは許容範囲だけどまた戦闘が出来る程度には肉体を鍛えが得る。これが目標だね。

……いや、もうひとつありますね。三代目火影を生き残らせないと)

三代目火影は言うならば穏健派だ。うちは虐殺にも唯一反対した。

私という不確定がいる以上ダンゾウがどう動くか分からない。そのために穏健派がいる。

(綱手さんも穏健派に当たるでしょうが。来るまで何かあっても困りますからね)

しかし三代目火影を生き残らせようとする時点で大蛇丸との戦闘は必至だ。

(経験を積まないといけないのに積む前に戦闘になりそうですね。世の中本当にままならないな)

余談ですけど白眼が出来るようになった際に日向家のハナビとは許嫁になりました。

まあ、白眼が使えるなら日向に取り込みたいですね。ハナビは嫌いじゃないですからいいですし、

設定

【名前】

前世は暁、現在はナナミ、
名前が変わった理由は暁だと都合が悪いだろうと神が変えた。その際自らの子なのに名前を簡単に変えたのは暁は本当の名前ではないため（話の内容には関係ない。また本人は知らない）、

【容姿】

前世は白銀の髪に金色の瞳で百人中百人がきれいという容姿で見た目美少女、現在は刀語のほとんど七実で白銀の髪に金色の瞳、

【能力？】

万華鏡写輪眼：開眼した瞳術は右が神炎と左が空門、
神炎：天照と違い白い炎で永遠に燃えるわけではないが、燃え散る速度が異様に速い上にチャクラ消費が天照よりも少ない。なお、燃える範囲はチャクラによって増える。

空門：空間を歪めてほかの空間につなげる瞳術。チャクラ消費は激しい、

またイタチの万華鏡を見た際天照と月詠を会得した。

万華鏡はほとんど六亡星のような形で中心の大きな空間には写輪眼と同じく三つの勾玉文様があり他の空間には一つの空間につきひとつ勾玉文様がある。

白眼を使う際は瞳が白くなり日向と変わらない。
写輪眼と白眼を同時に使う際は瞳は写輪眼で白眼と同じく目の周
りの血管が浮き出る。

【備考】

飛行機事故にて死亡し神に転生させてもらった。

またその神（最高神）は父親であり母親は稀代の魔術師、

神からは生まれた時から万華鏡写輪眼開眼、視力も落ちない入れ
替えた状態で転生させてもらった。

また刀語の七実の才能をもらっているが事實は違い神の子である
ため半神半人で親が最高神の為あらゆる可能性、才能を秘め、封じ
られている。七実の才能はあくまで本人からその秘めていた才能を
目覚めさせただけそのため才能が成長したりする。

幼い時はうちの異端の鬼才と呼ばれていたが、白眼も会得した
今は木ノ葉の異端の神童、木ノ葉の異端の鬼才と呼ばれている。

また以前ヒナタを助けた縁からうちは虐殺以降は日向家でお世話
になっており、今の日向家内での立ち位置は八ナビの許嫁、白眼も
使い才能もあるため日向家内からの反論はない。

第五話（前書き）

夏休みになったら投稿すると言っておいて八月になってしまいました。いませんでした。

遅れた理由はテストで英語が赤点だったり、ぐすん数学はかなりよかったのに、祖父の二回忌があったり、F a t e / E X T R Aをやっていたり、

．．．．．はい、最後のは自分のせいですね。すいません。

何はともあれ投稿です。本当に遅れてすいませんでした。

第五話

私は今日課の朝の反復を行っている。

そう、反復、訓練ではない。

「ふ、こんなもんですね」

虚刀流、日向流を一通りやると私は一息ついた。

（は、全く七実が努力がどうのこうの行ってた理由がよくわかる。今や私の才能になったが私のも七実の才能も異常だ。螺旋玉に性質変化を加えるのは四代目火影が出来なかったことなのに私はすぐにできた。ナルトの影分身修行もやったが目立たないようにしたため出したのは三体ほどだ。

………本当にうらやましいね努力出来る人が）

「ナナミさん」

そんなことを考えていると後ろから声をかけられた。

「なんですか？ ハナビ」

声をかけてきた人物は日向ハナビ、一応私の許嫁だった。

「いつもの修行をお願いしたいんですけどよろしいですか？」

「ええ、いいですよ」

いつもの修行とは他の人には出来ない方法で付けている修行だ。内容は忍法・足軽を使った修行だ。つまり原作で七実が七花と戦ったときにやったように攻撃を放つのに相手にあたってもダメージをほとんど与えないのだ。

これが良い修行になる。寸止めではないからダメージはほとんどなくとも防ぐ練習になるのだ。

「では行きますよ」

私はハナビが構えると聞いた。

「はい」

「では、虚刀流 『雛罌粟』 から『沈丁花』まで、 打撃技混成接続 忍法・足軽応用編」

いうとわたしはハナビに攻撃を仕掛けていくそれをハナビは防いでいく、しかし徐々に防げなくなっていき、防げなくなり、

「はい。おしまい」

攻撃が終わるとハナビが地面に倒れた。

「あたったのは272回中234回、だいぶ防げるようになりましてね」

「父上やナナミさんが修行つけてくれますしから」

「そうですね、けどハナビも頑張ってますよ」

「／／／」

そう言いながら私はハナビの頭をなでるとハナビは顔を赤くしてしまっただ。かわいい、

事実ハナビは頑張っているだろう。原作では登場はほとんどしなかったがネジ以下だったのに今はネジよりもわずかに上だ。戦闘力は接近は間違いなく下手な中忍よりもあるぐらいだ。しかもネジも原作よりも強くなっている。原作のように宗家を怨んではないから戦うかは分からないが原作通りナルトと戦ったらたぶん勝つだろう。まあ結局九尾のチャクラ出したらどうなるかは分からないが。

「じゃあ今日は下忍班の発表日だしこれでやめておこうか」

「はてか、なんで俺まで担当上忍なんですか」

「仕方がないでしょ」

「それにうちの班、日向にうちは、うわ〜面倒、てかなんでうちはなのに先輩の班じゃないんですか？」

「ナナミはもう写輪眼が使えるからね」

「さすが木ノ葉の異端の神童」

「ヒアシ様の話だともうそこらの上忍よりも強いとか」

「……………担当上忍必要ですか？ それも上忍にしましょうよ。良いじゃないですか最年少上忍で」

「まっ、規則だしね」

(さてさてどうなるかね班は)

今はアカデミーにいる班の発表が始まるのだ。

(理想的なのは原作通りの班が組まれること、そこに私が入る必要はない)

「あゝ班の発表を始める。

次第七班、春野サクラ・・・・・・・・・・うずまきナルト！ それと・・・・・・・・・・うちはサスケ」

(よし、ここは原作通り)

「次第八班、犬塚キバ、日向ヒナタ、油女シノ、

次第十班、山中イノ、奈良シカマル、秋道チョウジ

次第十二班、日向ハナビ、うちはナナミ」

(まあ。妥当ですね)

「先生、班の実力が均等してないと思います。十二班は一位と二位じゃないですか」

「あゝ、その代りその班は二人班だ。人数不足を補うためだ。それにこれはもう決定したことだ文句言わない！」

現在私とハナビは担当上忍と共に屋上にいます。理由は自己紹介です。カカシと違い時間通り来てくれました。

「あゝ、じゃあ自己紹介と行こうか。俺は黒土コク。好きなものは

平穩、嫌いなもの趣味は無い。将来の夢は結婚して子供生んで孫に
囲まれながら寿命で死にたいな」

担当上忍は黒髪黒眼の男性だった。結構出来るだろう。

「私はうちはナナミです。好きなもの嫌いなものは特にありません。
趣味は読書です。将来の夢は先生と同じですかね」

「私は日向ハナビです。好きなものは秘密です。嫌いなものは特に
ありません。趣味は鍛錬です。将来の夢も秘密です」

好きなものの時と将来の夢で私の方を見たのはなぜでしょうか？

「そうか。じゃあ明日演習するから」

「わかりました」

まあ確実に実力テストだよな。

「じゃ解散」

「じゃあ、ハナビから実力テストするから」

（は？）

翌日担当上忍は集合するとそんなことを言い始めた。

「あの、これってこの実力を確かめる試験なんですか？」

「いや、普通はそうなんだがお前たちはもう中忍以上の実力を持つてるから合格は決定してるんだ。だから今後の任務の為にこの実力を見るんだ」

「なるほど」

「では、始めるぞ、来い」

「はい」

「お〜やるね〜先生」

いま目の前ではハナビとコク先生が模擬戦をしているのだがハナビが不利だ。ハナビは中忍クラスの実力があるとはいえ相手は上忍しかも戦い方もうまい。確実に距離をとり術を放つ、ハナビも回転で防いだり空掌で攻撃したりしているのだが当たらない。それに

（たぶん体術でもハナビよりも上ですね。原作には出ていなかったんですけど暗部ですかね？ ダンゾウが糸を引いている可能性もなきにしかず、か）

そのあとは実力を確かめるためか多少接近戦もしたが結果はハナビの惨敗だった。

（今度、遠距離用の術を教えましょうか？ それともこのまま強く

して接近に持ち込めるようにするか？)

さて、ハナビが終わったんで私の番ですね。

第五話（後書き）

次回戦闘シーンがありますがナナミは最強なんで短いです。

第六話（前書き）

戦闘シーンが下手です。くずです。どじりかったらじつはく書けるの
でしょっか？

第六話

「私の番ですね先生」

「ああ、構えろ」

（構えろとは言っても写輪眼で幻術なんざ使われればすぐに終わっちまうんだが）

「では、白眼」

言つとナナミは白眼を発動すると構えた。まあ構えたといつても虚刀流・零の構え『無花果』なので構えたと言えるかどうかは微妙だが。

「ん？ 写輪眼は使わないのか？」

「ええ、これは実力を見るテストですから写輪眼で幻術をかけるのはどうかと思ひまして」

「まあその方がありがたいって言えばありがたいが幻術を使わなければいいだけだろ」

「ええ、ですから私にとって写輪眼は幻術をかける以外に使い道がほとんどありませんから」

（まあ万華鏡は別なんですけど）

「……………なんだあれか？ お前忍術とか体術とか幻術とか写輪眼なしにコピー出来るのか？」

「ええ、まあ写輪眼を使った方が効率がいいんですけど、裸眼だと不意を突けますから訓練も兼ねまして、さすがに後ろの方は見えませんのでうちはなのに白眼の方を多用するようになってしまいました」

「・・・・・・・・・・は？」

一応確認のためにコクがハナビの方を見るとハナビもその視線に気がついたのか頷き返した。

（おいおいまじかよ。うちも最後にとんだ化け物を生みだしやがった）

「では、始めましょうか」

「あ、ああ」

（こいつに訓練なんざ要らないだろ！？ 木ノ葉の里の忍びが皆術を見せれば木ノ葉最強の忍びの誕生だろ！？）

そう思いつつもコクは構えた。

「行きます」

言っとナナミは一瞬でコクの前に現れ掌底を繰り出した。

「はっ」

「!?!」

下忍には、中忍だとしても早すぎる速度の移動と掌底に驚いたがさすがは上忍、なんとか避けた。

「はっ」

しかしナナミも掌底を繰り出し続ける。

これが普通の掌底ならば受けるという選択肢もあつたが経絡系を攻撃してくる以上その選択肢はとれなかつたため後退した。

「まじで上忍くらs!？」

コクが後退した瞬間にナナミは印を結んでいた。それに気がついたコクはとっさに同じ印を結び術を放った。

火遁・豪龍火の術

印を結ぶのが遅かったためそれはコクの近くで相殺されたためコクは爆風にのまれたが爆風の中からほぼ無傷のコクが出てきた。しかし

(おいおい。とっさだったから本気で放っちゃまったのに相殺とはマジで化けもんだぞ!?)

「虚刀流」

「!？」

ナナミはすでに背後に回り込んでいた。

「『雛罌粟』から『沈丁花』まで、
打撃技混成接続
忍法・足軽応用編」

ナナミは272の打撃技を叩き込んだ。背後からのそれをコクは防ぐことはできなかった。

「がつ!？」

(本当に忍法・足軽応用編は便利だね)

272の打撃技をくらい忍法・足軽応用編でダメージはほとんどないとはいえ地面にたたき落とされたコクを見ながらナナミは思っ

た。

「終わりですね」

ナナミは着地すると聞いた。

「ああ、そうだな。てか最後のはなんだ？」

「あれは私が作った忍術で重さをなくすんですよ」
「お前どんだけだよ」

その後元から話に聞いた通り実力があつたため問題なく合格した。
その際

「お前たち今度の中忍試験に推薦するから、あナナミは合格したら
上忍に推薦するから」

と言われた。

その後日向宗家に帰り合格の報告をし小規模なパーティー？
みたいなのがあり寝た。
……そう寝たのだが。

『久しぶりだな』

夢？ に神が出てきた。

「久しぶりですね」

『うむ』

「で、何の用ですか？」

『うむ、わしからも合格祝いをやるうと、で願い一つじゃ』

「・・・いいんですか？」

『今回だけじゃがな（他の神どもめ本当は誕生日も祝いたかったのに）』

「そうですか、では」

第六話（後書き）

神は親バカです。

これで神の出番はなくなります。

次話でナナミの願いが明らかになります。

オリキャラ設定

【名前】

黒土 コク

【容姿】

黒髪黒眼で容姿は並よりわずかに上、

【能力？】

体術はガイよりも劣り、忍術はカカシよりも劣るが総合力ではあまり変わらない。そのため接近も忍術による遠距離もできる。
性質変化は土と火、

【備考】

もとは暗部に所属していてカカシの後輩でテンゾウ（ヤマト）の

先輩である。また、たまに根の仕事も引き受けていた。根やダンゾウに関しては好きではないが必要な存在と考えているため嫌ってもない。

態度や口調とは裏腹に感情に流されることなく冷静に物事を見て
いる。

第七話（前書き）

いつものごとく短いです。
刀語のネタばれがあります。

第七話

「………ん？ は、あ、あ、起きた、正確には戻ったですね」

私は神が祝いに来た次の日の朝目覚めた。いつもと違うのはNA RUTOの世界では一日たったただけだが私にとっては約60年たったということだ。

私が望んだ願いは刀語の七実への憑依、いくつか原作と変えてもらったが、
変えたもの一つ目が性別は男、これはもしも女になり万が一男を好きになったらショックのあまり首をくくるしかないからだ。まあならないとは思いつけど身体に精神が引つ張られる可能性を考えて変えたのだ。

二つ目が七実の身体を通常の戦闘は普通にできる。病では死なないだ。これは普通に戦闘するため、病で死なないためだ。

これで気がついたかもしれないがこの願いの目的は戦闘経験を得るためだ。まあわざわざ刀語の七実にしたのは虚刀流を使える自分は完了形変体刀・虚刀『鑢』に届くかどうか気がなったのもあるのだが。

まあそんな訳で今まで刀語の世界で生活してきたわけだ。

そうそうもしかしたら気になる人もいるかもしれないから私が過ごした刀語と原作の刀語の違いを話しておこう。

- 1、七実（以下私）が男という点だ。
- 2、私が悪刀『鏢』を所有はしたが使用をしなかったことだ。
- 3、私は七花に負けなかった。ちなみに殺してもいない。
- 4、七花との戦闘後私も付いて行ったことだ。
- 5、四季崎 記紀（鳳凰）を殺したのが私、四季崎 記紀いわく

私も七花も完了形変体刀に至っているらしいが予想よりもはるかに私の方が上らしい。

6、 真庭 人鳥も私が殺した。

7、 とがめが死ななかつた。

8、 とがめが死ななかつた代わりに七花も怪我を負ったので四季崎 記紀の完成形変体刀十二本を破壊、將軍を殺したのが私だということだ。

9、 私ととがめが生きているので原作では七花と否定姫の旅に私とがめが加わった。

まあそんな感じで旅をさせていただいた60ぐらいで息子や娘や孫、七花やとがめやその息子娘孫に囲まれて死んだ（否定姫は私の数年前に死んだ）。

余談だが結婚相手は否定姫だ。

しかしこれで戦闘経験は養われた。ついでに痛みの耐性もさまざまじく着いたし、拷問を受けても大丈夫な自信がある。だって私に宿っていた病が与える痛みと苦痛以上のものがあると？ あるなら逆に体験してみたいものだよ。

てか戻るまでNARUTOの世界のことなんて忘れてたよ。戻った時に思い出したのは神のおかげだね。たぶん、

まあ何にしてもこれで経験の面で後れをとることは少なくなっただろうし人も殺せる。まあ人は元から殺せただろうけど、

「ふー、とりあえずちかじか起こる問題は中忍試験ですけど大蛇丸以外は全く問題がありませんね。出来ればここで大蛇丸を始末したいものです。あとはダンゾウをどうするか、三代目が生きればすでにほぼ日向に組み込まれている以上上層部も手が出せないと思いませんけど警戒は必要ですね」

余談だが刀語の世界で会得した技もこちらで使えた。

第七話（後書き）

あと二話ぐらいで中忍試験に入ろつと思います。

第八話（前書き）

ナナミにとっての草とは刀語の七実の草。自分以外の人間とは違
い草。自分にとってどうでももいい人間です。

第八話

下忍になってしばらくたった。

どうやらコク先生はいい？ 先生のように私とハナビも他の下忍がやるような任務をやらされた。うん、良い先生だな。アカデミーでは私やハナビ、サスケ、ヒナタを他のものと区別しないのはイルカ先生だけだったし、

まあ畑を耕すとかは影分身で終わらせ、迷子のペット搜索は白眼で終わらせたので全く苦にならなかったが、

そうそう担当上忍は自分の部下の下忍の修行を見るのだけどコク先生がやるのはほとんど手合わせだけだ。

理由はある。まずハナビに日向流を教えるのは無理、そのため実戦形式の訓練しかできない。私に至ってはすべての面でコク先生を上回ってる。

余談だがコク先生は「教え子にすべての面で負けている俺って、鬱だ死のう」といってortの状態になってハナビとともに慰めることになった。その時ハナビと共にウザいと思ったのはしょうがないことだろう。

さて、任務はナルト達のように特別なものはなかったので省略させていただきます。

では私が主に何をやってたのか話したいと思います。

「ナルトは波の国に行くと言ってましたね」

今日任務の報告に行った帰りにナルトに会い聞いたことだ。

(波の国には白が出てくる………試してみるか)

私は影分身を出した。

理由は白の血継限界を会得するためだ。

ここで問題なのはまず影分身では見て覚えることはできても肉体をいじくることはできない。

そこで覚えた情報を元に直接見なくとも覚えた情報で会得できるかのテストになる。

なおこれは成功しナナミは氷遁を会得した。
とはいっても上記のものは例外で他は以下のような感じだ。

朝起き、朝食

訓練、ハナビと稽古、ヒアシさんと稽古、

昼食、猫と戯れるorハナビと出かけるor読書or縁側でお茶を飲みのんびりするor訓練。

訓練、夕食

訓練、ハナビと稽古、風呂、寝る。

………うん、大まかにはこんな感じだね。任務がある場合は代わるけど、

まあこんな感じで至って平和な毎日でした。

「で、お前たちを中忍試験に推薦してきたから」

さて、今日はコク先生に呼ばれてきたのですが唐突に言われました。

「先生いくつか質問をよろしいですか？」

「ん？ なんだハナビ」

「第十二班は私とナナミさんの二名なんですがどうするんですか？」

「そのまま参加だ！」

「……………問題ないんですか？ 基本的に下忍はスリーマンセルですよ」

「ああ、確かに中忍試験は毎年内容が変わるが班で審査される試験がひとつは必ずあるが問題ない」

「……………それは不利なのは？」

ハナビが言うところコク先生は遠い目をしながらハナビの肩に手を載せながら言った。

「なあ、ハナビ、お前は中忍ぐらいの実力はあるよ」

「ありがとうございます」

「うちの里の下忍ではお前は2、3番を争う、いや二番だろう。そうそう下忍には負けないだろうが他里にはお前ぐらいの実力で構成された班があるかもしれない。そうしたら二人班では不利だろう・・・ふっつは」

「はあ」

「よく考えてみるハナビ、お前のパートナーは誰だ？ お前の許嫁は誰だ？ どれほどの実力だ？ ははは上忍だって勝てるやつは殆ど・・・うん、ほとんどでもいいな・・・一人でも反則だろ？ みんな思うぞ。これが下忍とかありえないと」

ハナビはパートナーと許嫁という言葉に顔を赤くしたが私を見ると頷いた

「そうですね。ナナミさん今朝も父上と体術でほぼ互角に戦ってましたから」

「・・・本当に下忍でいいの？」

「まあ先生は今回試験を受ければ私もハナビも中忍になりますから（まあ中忍試験が途中で中止になるからどうなるか分からないけど、さすがに実力があっても最終試験で試合をしなきゃ無理だろうし・・・たぶん）

「まあそうだな。お前たちが受からないはずがないしな」

「まあ、世の中に絶対はありませんけどね」

その後は実戦形式の訓練をし、解散した。

その際ナナミに完敗したコクが落ち込んだのは言うまでもない。

「は」

「ん？　どうかしましたかハナビ」

私はハナビが珍しくため息をついているので相談に乗ろうと話しかけた。

「いえ、さすがに中忍試験は少し緊張しまして」

「ん、大丈夫だと思いますよ。木ノ葉の下忍でハナビよりも強いのは現時点では私だけ、互角に戦えるかもしれないのだからネジだけです。他里の下忍の実力は知りませんがそうそうハナビと同レベルはいないと思いますよ。ハナビは強いですから」

「そ、そうでしょうか／＼」

私に褒められたからか顔を赤くしてうつむくハナビは可愛いな、
と思いながら中忍試験について考えていた。

（大蛇丸、まず初めに死の森で私とサスケのどちらに来るかですわね
・・・ ああ両方に来る可能性もありますか、
とりあえず私の方に来たらハナビを逃がした後戦うしかありませんわね
しかも殺せない。この時点で殺したら砂と音がどう出るかわからないし、我愛羅が風影にならなくなりそうだし、今後のことを考えると原作通りにナルトと仲良く？　なつて風影になつてくれた方が得
ですわね。木ノ葉崩しで被害は出るでしょうけど、私にとつてそれはどうでもいい、つまり草でしかない。私にとつて草で無いのはハナビ、ヒナタ、ヒアシさんなどの関わりのある日向一族の人たち、ナルト（原作主人公ではなく友人として）、シカマル、チョウジ、シノ、キバという友人、サスケ（イタチとの約束の為）、一応コク先生だけだ。他は喜んで身捨てたりはしないけど無理して助けよう
と思いませんわね）

さて、本当に一番目の厄介事、中忍試験はもうすぐですね。

第八話（後書き）

次回から中忍試験です。

第九話

ついに始まりました中忍試験。

最初の幻術は幻術返しをしてやるうかとも思ったけど普通にスル
ーして集合部屋？ で始まるのを待ってる。

「……………ナナミさん同期の面々は何やら集まってるみたいで
すよ」

どうやらナルト達が来たらしい。

「じゃあ私たちも行ってみますか」

「はい」

「どうも、ヒナタ以外は久しぶりですね」

「あつ、ナナミ久しぶりだってばよ」

おやおやサスケいきなり敵意むき出しの歓迎かい？

そんなことを考えていると音隠れのスパイであり、受験生の一人
である薬師カブトが話しかけてきた。

「おい、君達。もう少し静かにした方がいいな……………」

君たちがアカデミーを出たてのホヤホヤの新人11人だろ。可愛い顔してキャツキヤと騒いで……まったく、此処は遠足じゃないんだよ」

「誰よ、アンタ。エラソーに！」

は、確かに偉そうだけど一応先輩なのは額当て見ればわかるのだからもう少し礼儀正しくするべきだろうに、

「ボクはカブト。それより辺り見てみな」

「辺り？」

サクラを始め、周囲を見回して一部を除いた新人達が青褪める中、カブトは気づかれぬようにナナミを観察する。

(これが木ノ葉の異端の神童うちはナナミ。情報では実力はすでに上忍クラス。その情報を裏切ることなくこうして見ても隙が見当たらない。

……もしかしたらボクよりも強いかもね。少なくとも上忍クラスは本当だろう。やれやれうちはも最後にとんだ化け物を生みだしたものだ。大蛇丸様も写輪眼に白眼も使えるとあってえらくご執心だしね)

「君達の後ろにいるのは雨隠れの奴等だ。まあ彼等だけじゃない、試験前で皆ピリピリしている。どつかれる前に注意しとこうと思つてね」

その後は原作通りサスケが我愛羅とロツク・リーの情報を聞きカブトが音忍に襲われ中忍選抜第一の試験が始まった。まあ試験は私も白眼で普通にクリアしましたけどね。さて次の試験からが本番ですね。

第九話（後書き）

次から本格的に中忍試験です。

第十話

「第二の試験会場、第四十四演習場。別名『死の森』よ！」

ついに第二の試験ですか、

ここで大蛇丸を消すわけにはいかない以上最速で塔を目指すべきですね。こちらには白眼もありますしそう難しくはないですね。

それにしても第四十四演習場、通称死の森とやらは巨大過ぎる樹木が立ち塞がり奥の方は窺えないほど暗く薄気味が悪いうえ猛獣や危険な生き物も生息している。未開の樹海という表現がぴったりな場所ですね。

「ふふん、此処が『死の森』と呼ばれる所以はすぐ実感する事になるわ」

「へっ、そんな脅しても全然へーき！ 怖くないってばよ！」

空気を読まずに張り切って啖呵を切るナルトを見てナナミは呆れた。

「そう。君は元気が良いのね」

アンコはニコニコと笑顔を浮かべた直後、下忍の眼には止まらぬ動作でクナイを放ち、ナルトの背後に回る。

普通試験官は受験者に攻撃してはいけないのでは？ 常識的に考えて。

「でも、アンタみたいな子が真っ先に死ぬのよねえ。私の好き

な赤い血ぶち撒いてね」

一閃した頬の傷から流れるナルトの血を、アッコは舌で美味しそうに舐める。

「……………変態の弟子はしょせん変態ですか。」

「クナイ、お返ししますわ」

「わざわざありがと」

アッコの背後に忍び寄った大蛇丸はアッコと強烈な殺気を撒き散らしながら対峙する。

（……………大蛇丸。頼みますからサスケだけにしてくださいよ。撃退は出来るでしょうけど手の内は隠したいんで）

「じゃあ、次」

私とハナビは同意書と巻物を交換した。

「地の書ですか」

「そうですね」

ナナミとハナビの受け取った巻物は地の書だった。

「どうしますか？」

「そうですね。私もハナビも白眼があるので白眼で周囲を警戒しつ

つ獲物を見つけ狩り、最速で塔を目指すのはどうでしょう？」

「それでいいと思います」

「では行きまそうか」

「はい」

「……………ナナミさん」

「……………助けますか？」

「はい！」

どうもナナミです。現在は我愛羅が雨隠れの忍びを殺したところ
です。

これまで記す価値すらない草を刈り（殺してはいません）巻物をもとものを含めて地×2、天×1を手に入れたので塔に向かっていたら遭遇しました。そしたらハナビが助けたいと言ったので助けることにしました。まあ元から助けるつもりだったけど、まかり間違つて殺されたら困るし、

「では、私が瓢箪と女を抑えますのでハナビは残りの黒いのを、黒いのはおそらく傀儡使いです」

「分かりました」

私とハナビは我愛羅達の前に姿を現した。

「「!?(……………)」」

我愛羅達がこちらに注意をふけるとヒナタ達に目で早く逃げると

合図をした。

ヒナタ達が逃げると私は我愛羅達の方を振り向くと言った。

「さて　むしってあげる」

その瞬間ナナミから殺気が放たれた。

それは死を連想させるどころか死そのものといってもいいものだった。

その殺気に向けられた三人は同時に理解したこいつ我愛羅（自分）以上の化け物だと、そして3人が完全に隙を見せた瞬間にナナミが我愛羅とテマリ、ハナビはカンクロに攻撃を始めた。

火遁・豪火球の術

ナナミは豪火球の術の術をテマリに向かって放った。

「な、舐めるな！　風遁・かまいたちの術」

テマリは術で応戦してきたためさらに術を使った。

「風遁・大突破」

大突破はかまいたちの術ごとテマリを吹き飛ばした。

「砂縛柩」

「あまい」

我愛羅が砂を操り私をとらえようとしたので八卦掌回天で吹き飛ばした。

私は足元の砂を操られる前に我愛羅に接近した。

「虚刀流 『飛花落葉』 接続 『鏡花水月』」

花落叶は我愛羅の砂の鎧を破壊し鏡花水月の強烈な拳底は我愛羅を浮かせ吹き飛ばした。

「まあここで殺すわけにもいかないものでこれでいいでしょ。それにしてもつまらない」

つまらない。今の戦闘でナナミが抱いた感想。

ただつまらない。

ナナミの豪火球、大突破、テマリのかまいたちの術、我愛羅の砂縛枢、戦闘の時間こそ短いものの並の下忍では4回は死んでいた戦闘をしたにもかかわらずナナミはつまらないと感じた。

「さて ハナビの様子でも見に行きますか」

ハナビはカンクロと対峙していた。

この時カンクロは決定的なミスを犯していた。それは安堵と油断をしていたことだ。しかしこれはしようがないのかもしれない。初めて我愛羅以上の化け物を見てそしてそれが目の前からいなくなったのだ。安堵してもしようがないだろう。そして感覚も麻痺していったのだろう。普段ならハナビも油断の出来ない敵と分かっただろうが先ほどナナミとあってしまったためハナビをナナミと比べ油断してしまっていた。

そしてそれが決定的な隙になった。

ハナビはカンクロに接近すると手の点穴を突いた。

「なっ」

カンクロは距離をとり傀儡を操ろうとしたがチャクラが出ず操れなかった。

「どうなってるじゃん!？」

「油断した時点で貴方の敗北は決定していました」

ハナビは動揺したカンクロに接近し蹴り飛ばした。

「終わりましたか」

「ナナミさんの方も終わったんですか？」

「ええ 殺してはいませんが殺すよりも急いだ方がいいですし

巻物もそろってますから」

「そうですね」

「では 行きましょう」

「はい」

ハナビは現れたナナミと共に塔を目指して移動し始めた。

「テマリ無事じゃん？」

「ああ、なんとかな」

ナナミとハナビに撃退されたテマリ達は集まっていた。

「それにしてもあいつ化け物みたいなやつだな」

「まったくじゃん。もう一人も方も油断できないじゃんよ」

少しすると我愛羅もやってきたが二人は驚愕した。

我愛羅が血を口から流しているからだ。

それを見た二人は木ノ葉の忍びの、正確には先ほどの二人への警戒をより一層強めた。

第十一話

「あ」

「どうかしましたか？」

塔にかなり近づくとその気配は近づいてきた。

「……………ハナビ先に塔で待っててください」

「……………分かりました」

ナナミは言うところハナビは少し考えたが従った。

ハナビはナナミを信頼していてそのナナミが自分に先に行けと言うことは自分ではかなわない敵がいるということだろうと判断したのだ。

余談だがハナビもナナミも巻物がそろった時点で白眼の発動はやめているナナミは探れば周囲の気配に確実に気がつくからだ。

「では、先に行きます」

「ええ 気をつけて」

ハナビの気配が遠ざかるとナナミは話し出した。

「さて 出てきたらどうですか？」

「あら、気配は完璧に消していたはずんだけどどうして気がついたのかしら？」

「久しぶりに聞きますよ そういつ台詞」

最後に効いたのは真庭 人鳥だったかな？ いや覚えてもいない
刀語後の旅中に襲撃してきた草も言ってたっけ？

「むしろ私の方が訊きたいくらいなんですけど どうして生きて
いる癖に、気配を消せるなどと、そんな大それたことを思えるので
すか？ そこにいる人は そこにいる人でしかないでしょう」
「……………教える気はないというわけね」

……………まあ分かるはずありませんね。

「では、無駄話もやめて 始めましょう」

虚刀流『鏡花水月』

ナナミは虚刀流最速の技を大蛇丸に食らわせ吹き飛ばした。

「風遁・大突破！」

「風遁・大突破」

大蛇丸が吹き飛んだ方向から風が迫ってきたのでナナミは相殺し
た。

相殺はしたがナナミの周囲には砂煙が舞い上がった。

大蛇丸はそのすきに後ろに回り込み口から草薙の剣を吐きだしナ
ナミを斬ろうとしたが

「ぐあああ！？」

草薙の剣は大蛇丸に突き刺さっていた。

第十二話

69分、私とハナビが死の森の突破にかかった時間です。

歴代断トツのトップらしい。けど大蛇丸が邪魔しなければ一時間を切れた。

(別に記録にこだわりはないんですけど　ただでは終わりませぬ大蛇丸、こんなところで邪魔するとは)

まあそんなどうでもいいことを考えるほど暇です。

「ナナミさん。二番手がきたみたいですよ」

ハナビの言葉を聞き扉の方を見ると砂の三人が来た。すると我愛羅がこちらにやってきた。

「お前、名は」

「うちは　ナナミですよ。あなたは？」

「お前もうちはか、我愛羅だ」

それだけ言い残すと去って行った。

しかし早く到達すると待つんですね。まあ当たり前なんですけど、ハナビと組み手したり、お茶を飲んだりしてようやく第3の試験が始まる予選だけど、長かったですね。途中でヒナタ達が礼を言いに来たり、音の三人がこっちをみてびっくりしてたり(大蛇丸が襲う予定になってたと思われる)と大変だった。

そうそうカブトが来た時もこっちを見てびっくりしてましたね。

どうしてこうなった。

予選は途中までは原作通りだった。

初めにサスケが突破し（チャクラ吸収は会得したがサスケの対戦相手はすでに忘れた）、

シノが突破し（同じく対戦相手は忘れた。技は会得できる類のものではなかった（手術がいるから）ため会得していない）、
カンクロが突破し（対戦相手の名前は当然忘れ、関節を外す技は一応会得した）、

サクラとイノがドロー（心転身の術は会得した）、

テマリが突破し（対戦相手は確かテンテンだっただけ？ 武器に関する技は一応会得した）、

シカマルが突破し（もはや言うまでもなく対戦相手の名前は忘れ、影真似の術を会得した）、

ナルトとキバが戦いナルトが突破し（一応四脚の術などは会得した）、ここまででは原作通りだったのだが次のネジVSヒナタはネジは原作とは違い日向宗家を怨んでおらず関係も良好だったので初めは手加減しながら戦おうとしていたがヒナタに強い意志があると分かると本気を出し気絶させた。

……うん、ここはいいです。問題ないです。むしろすばらしいです。

この時点で残ったのは私にハナビ、我愛羅にロック・リー、チョウジに最後の音、これは原作通り+私対ハナビかと思ったらハナビ対チヨウジだった。

まあ試合自体はすぐに終わったのだけど、

「第九回戦はじめてください」

始まりと共にチヨウジが肉弾戦車でハナビに突撃したが、

「八卦掌回天」

回転と回転がぶつかり実力の違いでチヨウジが吹き飛び、そこにハナビが一撃を入れ終わった。

………うん、短い。

まあこれで残りは私、我愛羅、リー、音だけになったからたぶん私の相手は音だろう。

リーは残念だが名前を覚えているのは原作の登場人物で多少でたキャラだからにすぎない。それ以外は草でしかないのだから我愛羅につぶされてもらいましょう。

まあ元に戻るのだから問題ないでしょう。

「では第十回戦、ロック・リー対うちは ナナミ」

あれ？

第十三話（前書き）

駄文です。

戦闘シーンが下手です。

第十三話

「早々とアナタと闘えるなんてうれしい限りです・・・」
「どうでもいいです。早く始めましょう」

リーが降りてきて言ったので私はそう返した。

「構えないんですか？」

（ああ、始まらないと思っただらそういうわけですか）

「・・・構えて無駄だと思いませんか？ 何かあるたびにいちいち構えるだなんて その分だけ、動作が遅れるじゃありませんか。それに今のあなたがそうであるよう、構えを見せることで、大体の行動が予測できてしまいます。だからこそ私は構えません。しいていうなら 構えないのが構え。名前は虚刀流零の構え『無花果』
何処からでもどうぞ」

私達の戦闘の準備が出来ていると判断した審判が告げた。

「では、第十回戦はじめてください」

合図とともにリーが仕掛けてきた。

「木ノ葉旋風！！！！」

私はそれをただ普通に防いだ。

その後も仕掛けてきたが普通に防ぎ続けた。

(八門遁甲は覚えて置いて損はないですからね。裏蓮華は使っても
らいましよう)

「あの早いリーさんの攻撃が全然効かないなんて・・・」

「全然攻撃が通じねーってばよ」

「ナナミさんにはあの程度では当てられませんよ」

「ハナビ？」

「ナナミさんは普段父と組み手をしています。あの程度の速度では
いくらやっても無意味です」

「・・・！」

(まあ、これであいつの手の内が分かれば儲けもんじゃん)

会話をしている間もリーは攻撃しナナミは平然と防いでいた。

「どうしてリーさん体術ばかりなの！？ あれじゃ接近戦は厳しい
わ！ 少しは忍術で距離をおく戦いをしないと・・・！」

「リーは忍術を使わないんじゃない・・・
・・・使えないんだ。」

「・・・リーにはほとんど忍術・幻術の技術がない・・・
」

「う・・・うそ！ それじゃあどうやってこんな所まで残って・・・
」

「オレがリーとあつた頃は完璧ノーセンス・・・何の才能もなかつ
た。」

だから忍者としてリーにできる技は唯一体術しか残されてなかつ
たのだよ・・・

「……………忍術も幻術も使えない忍者なんてそうはいまい……………」
「(ぶっちゃけ、使えても勝てないぞ。ナナミには)」

リーの攻撃をかわし反撃にかかと落としをした。それは簡単に避けられたが場に驚愕をもたらした。

ドゴンツという音と共にかかとが落ちた場所にクレーターが出来たからだ。

それを見てリーは「食らっていたら終わっていた」といや汗を流し、ハナビ以外の下忍組は「ここまでナナミは無茶苦茶なのかと思い」と思い。バキは「木ノ葉の異端の神童は体術だけでも化け物だ」と思い。下忍以外の木ノ葉の人間と元木ノ葉の大蛇丸は「どこの綱手(姫)だよ」と思った。ハナビは純粹に「ナナミさん流石です」と思っていた。

リーは大きく距離をとり息を整えた。

「リー！ 外せ ……!!」

「!!」

(ようやくですか、早く裏蓮華を見せてもらいたいです)

「……………でもガイ先生! ……それは 大切な人を“複数名

” 守る場合の時だけじゃなければダメだって……………!」

「構わ ……ん!! オレが許す!!!」

「……………!!」

……………アハ……………ハハ……………」

リーは重りを外し始めた。

「よーしい！！これでもつと楽に動けるぞ　　！！！」

リーの重しは地面に激突するとわたしが作ったクレーターと同じ規模のクレーターを作った。

「……………」

「行け　　！！　　リー！！！」

「オッス！！！」

言つとリーは先ほどとは比べ物にならない速度で近づき、攻撃してきた。

しかしナナミはそれを防いだ。

「！？？」

（先ほどまでの速度で少々目が慣れてしまつて面倒ですね）

「リー！！　爆発だあ　　！！！！」

「オッス！！！」

リーはさらに加速しナナミに攻撃した。

ナナミはガードしたがすぎに後ろから攻撃が来てそれもガードしたが次の蹴りをくらつてしまいかなり吹き飛んだ。

その場にいたハナビとネジとコク以外はだれもが重い一撃を叩き込んだと思つたがナナミは途中で宙返りをし平然と着地した。

「！？？」

「ふゝ、油断しました。いきなり早くなるからびっくりしましたよ」「……………効いてないんですか？」

リーは当然の疑問を口にした。

「はい。わたしの作った忍法　足輕、簡単にいえば自身の重さをなくす忍術　まあその実態は歩法なんですけどね。あなたの攻撃が当たる前に重さが無いから風圧で　飛んでしまっただけですよ」

その場の全員が理解した。

ナナミに打撃攻撃は効かない　と、

「それでもっ！」

リーは接近するとまた攻撃したが今度はすべて初めよりはナナミも動いたとはいえ防がれてしまい距離をとった。

「なんで？」

「言いましたよ。いきなり早くなるからびっくりしたって　この程度なら問題ないです。さらに」

言つとナナミは白眼を使った。

「これで盤石です。ほぼ360度を見渡せますから　そして次はこちらから」

言つとナナミは一瞬でリーに貫手を食らわせ、ぶら提げていたの方手が急に命を宿しかのように動き、下方から上方へむけて繰り出される。

リーは貫手に続き手首を返しての切り上げの手刀をわき腹に食らった。

「がああ!？」

「虚刀流　『蒲公英』　虚刀流、『雛罌粟』」

リーは吹き飛びナナミは静かに言った。

「棄権してください。あなたの攻撃が通じないのは分かったはずで
す。あなたは別に弱くは ありませんでしたよ。速度だけなら私
を除けば下忍一かもしれませんね。ただ 運が悪かっただけ。あ
なたはここで終わりです」

（まあ棄権しないでしょうけど）
「・・・・・・・・・・・・・・・・いずれにせよ・・・・・・・・次で終わり
です・・・・・・・・」

リーが集中し始めた。

（原作でも思ってたんですけどこの間に攻撃されたらどうするんです
ようか？）

「第三 生門・・・開!!」

（真っ赤ですね）

「ハアアアアア!!!」

傷門も開くとリーは動き始めた。

一瞬で目の前に現れたが普通に防いだ

（っ、私の凍空一族の腕力とほぼ互角、流星は諸刃の剣八門遁甲）

ダメージを与えることはできた。

（足軽では無理ですね。我愛羅がやられたように空中で袋叩きされ
ては無意味です）

リーの攻撃を依然と防ぎ続けるが先ほどと違いダメージは受ける。

「ハアア！」

リーは蹴りでナナミを空中に飛ばした。無論ナナミは防いでいたが。

そこからは第三者の視点で見るとすさまじいだろう。

リーは殆ど姿が見えないほどの高速で攻撃し、ナナミは四肢を見えない速度で動かし防いでいるのだから、

「これで最後です！！！」

リーは天上を足場にしナナミに突っ込んできた。

裏蓮華！！！！

八卦掌回天

リーの攻撃とナナミの防御がぶつかりすさまじい衝撃波が起き、砂煙が舞った。

砂煙が退くとそこには立っているナナミと地に倒れ伏しているリーがいた。

「勝者うちは ナナミ！」

審判がそう宣言した。

ただ原作通りリーは立ち上がった。

そこから原作と違うのは相手が我愛羅ではなかったため、原作よりも容体が悪くなかった所だ

第十四話（前書き）

かなり短いです。

第十四話

「お疲れさまでした。ナナミさん」

「本当に化け物だなお前」

さて、私はリーとの戦闘が終わると元の場所まで戻ってきたらそんな言葉をかけられた。

「いえいえ、彼は強かったですよ。この場にいる下忍の中では五本の指に入りますね」

「確かにすごかったです」

「確かに、けど、下忍に教える技じゃねえぞ。いや、ガイにも考えがあつてのことか」

まあ確かに下忍に教えるのはまずいですよね。

すべての試合が終わりました。

我愛羅は音の最後の一人を瞬殺しました。

そして今は本戦の相手を決めるくじを引いたのですが、

一回戦ナルト対ネジ、

二回戦ハナビ対ナナミ、

三回戦ガアラ対サスケ、

四回戦カンクロ対シノ、

五回戦テマリ対シカマル、

(所詮はハナビ相手ですか、理想なのは試合をせずに木ノ葉崩しだったんですけどね)

「　　と言つわけで、私は本戦が終わるまでいったんうちは家で暮らそうと思います」

「そうだな。分かった」

私は今ヒアシさんと話している。

本戦まで一カ月間の準備期間がある。

別に一緒に修行してもよかったのだが初戦の相手ではあれなので一カ月間だけ私がうちの家に戻ることにしたのだ。

「では、ハナビ次は本戦の会場であいましょう」

「はい」

私は日向の屋敷を後にした。

(さて、私は本戦まで何をしましょうか。

……術の開発とコク先生と模擬戦をしましょう。ハナビはヒアシさんが鍛えますから暇でしょうし)

第十五話（前書き）

いままでで最も短いです。
次からふつうになります。

第十五話

「はー どうしましょう」

私の手には風遁・螺旋手裏剣がある。

あれから二週間がたち初めの一週間はコク先生に付き合ってもらい模擬戦をしていたのだが、一週間前からは術の開発をしているのだ。

(やっぱり仙術チャクラがないと飛ばせませんね。

……後二週間で影分身も使って修行し仙術チャクラなしで飛ばせるようにしましょう)

私は多重影分身をし、修行を始めた。

「出来ましたね」

修行の結果は一週間と三日で完成だった。欠点はチャクラ消費が激しいこと、

「まあ上出来ですね。いつか 仙術チャクラも身につけたいですね。残りの時間は休憩に当てましょう」

それから私は残りの四日は寝たり、本を読んだりとリラックスしながら過ごしました。

第十六話

第一回戦は原作通り終わった。

違う点と言えばネジが過去を語らなかった点と、原作よりネジが圧倒的だった点だろう。

まあ結局は九尾のチャクラで、押し切られてしまったが、

(これは修正力と言う奴でしょうか？ それとも 主人公補正で
しょうか？)

そんなことを考え場からも次の試合は私とハナビ、

(どれほど強くなったんでしょうか？)

少々期待しながら私は戦うべき場に向かっていった。

私がつくと会場は木ノ葉の異端の神童と呼ばれるうちは一族の生き残り日向の姫との対決を今か今かと待ちわびていた。

「第二回戦開始」

「行きます」

審判が言つとハナビはナナミに接近してきた。

(早い)

ハナビの速度は重りを外したりーに僅かに劣る程度だった。
ナナミはハナビの攻撃を弾いた。

(やっぱり面倒ですね。日向流はやはり やりにくい。経絡系にダメージを与える分威力が高い。けど いつもよりも手に集めるチャクラが多い?)

ナナミは攻撃を弾き、弾かれながら考えた。

「はっ」

ハナビは掛け声とともに掌底を繰り出してきた。
ナナミはそれを最小限の動きで避けようとしたが

「ぐああ!」

ナナミは壁まで吹っ飛んだ。

「ごぼっ、げぼっ」

(さっきのは螺旋丸、確かに前螺旋丸を見せた時言いましたね。手にチャクラを集めるのだからそのチャクラを一瞬で増やして乱回転させて圧縮すれば螺旋丸になるから覚えたらどうですって まさか一カ月でものにするとは思いませんでしたね)

倒れていたナナミは立ち上がりながら自分の状態を確かめた。

なお余談だが螺旋丸はハナビが以前からナナミに内緒で特訓して

いたのであって一カ月にものにしたのではない。

(きついですね。あと一回でも食らったらまずいですね)

ナナミは強く、また全力に耐えられるよう身体は鍛えていても当然螺旋丸をくらって平気な訳がない。

(ハナビはこの一カ月で速さと純粹に日向流、それに螺旋丸を使えるようにしたみたいですね。この後の木ノ葉崩しを考えると 早く終わらせて医療忍術で治さないときついですね)

ナナミは立ち上がると言った。

「少々舐めていたようです。まさか螺旋丸を会得しているとは思いませんでした 本気でいきます」

言っとナナミは高速で印を結んだ。

火遁・豪龍火の術

ハナビは豪龍火の術を避けたがナナミは次の印を結んでいた。

風遁・大突破

大突破を食らいハナビは吹き飛んだが空中で体制を立て直したが

「虚刀流、『蒲公英』」

ナナミはすでに接近し貫手を放っていた。

ハナビはそれを身体を無理やりそらし掠らすだけで避けたが

「虚刀流、 『鏡花水月』」

もう片方の手で強烈な拳底を放った。

「がああ！」

無理やり身体をそらし避けたハナビは避けられずもろに食らい吹き飛んだ。

「じほっ、 はあはあ」

ハナビはなんとか立ち上がったがすでに遅かった。

「終わり」

その言葉と共にハナビの意識は闇へと落ちた。

ナナミはハナビを吹き飛ばすと自身は高速で移動しハナビが立ち上がると手刀を首に放ちハナビの意識を狩りとったのだ。

「勝者うちは ナナミ」

第十七話（修正）

「大丈夫ですか？ ハナビ」

「はい。もうだいぶ体の調子も良いです」

「そうですか、

……それにしても驚きましたよ。螺旋丸を使えるようになっただけとは」

「それでも隠れて特訓してましたから」

「では、そろそろ戻りますね」

「はい」

私はハナビの病室を出ると影分身で四体の分身を出し一体を残して消した。

「ここに居てもしもの時はハナビを守りなさい」

「分かりました」

私は一体の私の五分の一のチャクラを持った影分身を残しその場を去った。

（これでハナビは安全ですね。カブトクラスが来ようと殺せますし）

（始まりましたか）

私はあの場からは元の場所に戻らず、そこには影分身を送り本体は原作で三代目と大蛇丸が戦う場所に隠れていた。今は大蛇丸と三代目が会話をしている。

「動いているものを見るのは面白い・・・止まっているとつまらな　ちっ」

「殺し損ねましたか」

「ナナミ!？」

大蛇丸が話している間に殺そうと思いき配を消し近づき手刀で首を落とそうとしたが避けられた。

さすがに大蛇丸クラスにはばれますか、

まあ元々避けられるのは分かかってましたけど、

「ナナミなぜここに」

「いえ、火影様が連れ去られたので先回りを」

私が出てきたのに外の暗部も含め困惑している。

「さがっておれ、こやつは　」

「それはできません。火影様の実力を疑うわけではありませんが大蛇丸クラスですと万が一がありますし、何より火影様はお年　戦いに勝つても傷が元で亡くなったり、政務が出来なくなると問題でしょう?　安心してください。足手まといにはなりません。あれは

一度撃退しましたから」

「あら?　見逃してあげたのが分からなかったのかしら?」

「否定します。あなたが見逃したのではなく、私が追撃せず、見逃してあげたのがわからなかったんですか?」

ナナミと大蛇丸から殺気が漏れ、もうすでにこの場からナナミを

引かせるのは結界のこともあり不可能だと火影は判断した。

(他の下忍ならともかくナナミなら少なくとも身は守れるかの)

火影が戦闘服になると三人が同時に駆け出した。

火影は手裏剣を投げ印を組み始めそれと同時にナナミと大蛇丸も組み始めた。

手裏拳 影分身の術！

土遁・土流壁

火遁・豪火球の術

火影の手裏剣が分身し大蛇丸に襲いかかるも土の壁が防いだ。それと同時にまた大蛇丸は印を組み始めた。

ナナミの豪火球が壁を粉碎するとそこには三つの棺が出ていた。

「その術は」

棺が開くと三人の男が出てきた。

「久しぶりよのオ……サル……」

「ほお……お前か……年を取ったな猿飛……」

「お久しぶりです……三代目」

「まさか、このようなことで御兄弟お二人とミナトお主に再びお会いしようとは……残念です……」

(……あれ？ 四代目の魂は死神の元にあるんですね。なのに 呼べるんでしょうか？

それに四代目は私が入ったことに対するイレギュラーですね)

「……覚悟してください」

初代様！ 二代目様！！ 四代目！！！！」

（さて、私の相手は四代目ですね。厄介な、まあ 生きていた時よりは弱いんですけど、そういえばこの術で蘇ったのは治りましたよね。燃やせば消えますかね？）

大蛇丸が三人の頭に札の付いたクナイを入れた。

三代目が駆け出すと同時に四代目がクナイを二本投げた。

一本をナナミと三代目の後方にもう一本をナナミに向かって、

ナナミは向かってきたクナイを避けると四代目は飛雷針の術で目の前に現れるとナナミに触れもう一度飛雷針の術で飛んだ。

「さて 離れて戦闘ですか」

ナナミは三代目達から離れた場所に飛ばされた。

「まあ、そこまで離れてh ちっ」

飛んできたクナイをナナミが避けようと四代目が現れ螺旋丸でナナミを攻撃しようとしたがナナミは避け蹴りを入れようとしたが四代目は飛雷針の術で回避した。

（面倒ですけどこれ 簡単に攻略できるんですよ）

ナナミが考えながら写輪眼を白眼を発動するとほぼ同時に足元から樹が生えてきた。

それに合わせ四代目が周囲にクナイを投げ刺した。

(初代の術ですか)

そんなことを考えていると四代目が後ろに現れたので千鳥流しを使った。

四代目は千鳥流しにあたる前に飛び避けた。

(まあこうやって飛んできた瞬間が見切れれば千鳥流しで防げるんですよ。それが雷遁の鎧でもいいですし、けどこのままだと埒が明きませんね。飛雷針の術はもう会得しましたけど現状ではそれ以上の移動速度は出せませんし、このままだと三代目が死ぬ覚悟をしますし、仕方がありません 全力を出しますか)

ナナミが全力を出すと決めた次の瞬間、四代目の首が身体から落ちた。

三代目は初代、二代目と戦っている最中に気配が一つ消えたのを感じた。

その時三代目は驚愕した。

それはナナミが四代目よりも強いと思っていたからではなく大蛇丸がナナミを殺さないと思っていたからだ。

また大蛇丸も驚愕していた。

大蛇丸はサスケよりもナナミの身体の方が欲しかったため四代目に殺さないように命じていたからだ。四代目なら飛雷針の術でそれが出来ると思っていたから。

ゆえに二人はナナミの方を見るがなおさら驚愕することになった。二人の目に入ってきたのは首を切り落とされた四代目だったのだから、そして体が倒れるとその体は黒い炎に包まれ燃え尽きた。しかしそこにナナミの姿はなかった。

ザンツ、ドサツ

と言う音がし二人が視界を戻すとそこには首を落とされ、燃え始めた二代目とそばに佇む右腕が血まみれのナナミが居た。

「「なっ」」

さらに二人は驚愕した。

ナナミは自分たちに気づかれず一瞬で移動し気づかれず二代目を、二代目に抵抗すらさせず殺したのだから、

ナナミがゆっくりと視線を動かし初代を捉えると左腕を一閃した。すると次の瞬間初代の首が落ち燃え始めた。

「「!?!」」

もう、言葉すら出ず二人は驚愕した。

いくら穢土転生で呼び出され、頭に埋め込まれた札により人格がなくなつたため全盛期よりは弱いと言え火影と呼ばれた人間三人を短時間でたつた一人で殺したナナミに言葉もなかった。

「さて　あと一人」

瞬間大蛇丸は言葉を聞いた瞬間全力で後ろに飛んだ。

次の瞬間には大蛇丸が一瞬前まで居た場所には切り裂かれた跡が残っていた。

「は、ハハハ、イタチ以上の化け物じゃない」

大蛇丸は笑みを引きつらせながら笑った。

ナナミは視線を大蛇丸に移すと駆け出そうとしたが倒れた。

(?.....ああ、暗示が発動しましたか)

暗示、それはナナミが幼少のころから自分にかけているもの、内容は「全力を出した際に治癒が不可能になる前に動きを止める」、元々が強力な上に幼少のころから何度もかけているため、ナナミを含め誰にも解くことが出来ないまでになった暗示だ。

(仕方がありませんね。せめて出来るだけ原作通りにしましょう)

ナナミは安堵から笑い出しそんな大蛇丸に神炎を放ち、四代目を殺した後に屋根の樹から筆っておいた枝を剣にして投げ肩の腱を斬り足に突き刺さった。

「ククク、はーはっはっは　ぎゃああああああ!？」

神炎は大蛇丸を燃やす。

大蛇丸は転げ回り火を消そうとしたが足は縫い付けられており、何より火は素早く燃え散った。

大蛇丸は全身にひどいやけどを負い、腕は燃え散り、体もところどころ炭の状態だった。

(これで全身ぼろぼろ。綱手に治して貰おうとするかどうかは分かりませんが、今は叩けませんね)

「　!!!」

大蛇丸は叫ぶがそれは声にならない。腕が使えないどころか、全身が重傷では以上撤退するしかなく音の四人衆は結界を解くと大蛇丸と共に引こうとする。

「待てッ！」

三代目は大蛇丸を追いかけようとしたが倒れているナナミに気がつくをやめた。

ナナミの四肢は傷だらけでナナミがその場から動かなかったからだ。

（あゝ、心配してくれるのはうれしいですけど、どうせ問題はありませんから　大蛇丸を殺してくれた方がうれしかったですね）

ナナミがそんなことを思いながらもこうして木ノ葉崩しは終わった。

第十七話（修正）（後書き）

修正版です。

ご指摘のあった大蛇丸の再生につきましては、全身がひどいやけどで、腕は燃え散ったため撤退ということにかえさせてもらいました。

初めは腕が燃え散った状態じゃさすがに無理じゃない？ と思ったんですけど大蛇丸なら出来そうなので戦力的問題による撤退にしました。

すいません。いい理由が思いつかなかったんです。

なおこのため原作の綱手を呼びに行く際の大蛇丸戦はありません（たぶん）。まあもともとナナミはかわらないので関係ないんですけど、

枝を剣にしたというのは全刀『鑄』の力です。

以下全刀『鑄』についてとなぜ使えるかの説明です。

刀語のネタばれがあります。いやな方は見なくてもたぶん問題ありません。

全刀『鏑』：四季崎記紀が虚刀『鑢』と共に完了形変体刀の候補として残っていた刀。四季崎記紀は最後の最後までどちらを完了形変体刀に決めるか悩んでいたとか、
能力？ はあらゆる物体を刀として扱うことができ、刀を使わない虚刀流の対極となっている。鏑一族は全刀流そのものである。

原作で七実が父親の六枝が英雄になる所を見に行こうとし、見失い彷徨っていたところ、たまたま六枝を狙っていた鏑 黒鍵を見つけた、半年にわたり戦いを繰り返した。

ナナミは刀語に行つた際にやることもないから見に行こうと同じく見失い戦い、七実とは違いすでに見稽古を会得していたため会得しました。ただし虚刀流と同時に使えない（例：全刀『鏑』で剣にした物で戦いながら虚刀流の足技、歩法などは使えない）。

鏑 黒鍵：棒状のものなら何でも剣として使うことができる。これは黒鍵の特徴ではなくて虚刀『鑢』と並んで完了形変体刀の候補となっていた全刀『鏑』の特性。

「死神」「劍聖」等と呼ばれる歴史上最強の剣士。
將軍家に仕える十一人に一人で匹敵し、ただの素振りだけで地を割り天を裂き全てを吹き飛ばす暴風を生み出す。

見た目は5歳にも満たない子供だが、実際は30歳以上で子供も1人いる。語尾に「にゃん」と付ける口癖がある。四季崎に関する因縁を息子の代まで引き継がせたくないと思っている。白兵の父親？
最初で最後の本気で戦える相手、鏢七実と出会い半年に渡って戦い続けた。

第十八話（前書き）

今年最後の投稿です。
・
・
・
・
・
たぶん。

第十八話

「どうぞ」

「どうも」

ハナビがリンゴをむき切って渡してくれたのでお礼を言い食べる。

「おいしいですよ」

「よかったです」

あの後体が動かないので病院に運び込まれた。

現在は自分でも医療忍術をかけながら入院中です。

ハナビがよくお見舞いに来てくれます。

イタチさんが来たらとりあえず現在までのことを報告しましょう。

一応力カシさんに影分身を張りつかせてます。

「………里はどうなるんでしょうか？」

「はい？」

「火影様は無事でしたけど被害は大きいです。上忍の人たちも任務で忙しいみたいです、」

「そうですね。確かに大変でしょう。少なくとも五代目火影は決めるんじゃないですか？ 三代目もお年ですし こんなこともありましたし」

「そうですね。誰でしょうか？ 伝説の三忍の一人の自来也様が現在里に居らっしゃいますから自来也様でしょうか？」

「どうでしょう？ もしかしたら綱手様を探しにいくかもしれませ

んよ。あの人は初代のお孫さんですから」

「そうですね。それに父上に自来也様は変態だと聞きましたし、変態に火影は無理ですよね」

「……………そうですね」

何教えてるんですかヒアシさん。

てか知ってたの？

さてついに来ましたイタチさん。

全然待つてないんですけどね。

私はカカシさんが月詠を食らってガイさんが少し戦闘してから登場です。

「お久しぶりですね。イタチさん」

「……………ナナミか」

「「「ナナミ!?!?!?!」」」

なんか外野が驚いてるけど無視です。
速攻でイタチさんに月詠をかけます。

「……………ならばねずに会話が出ますね」

一瞬が72時間になるんです。話す時間は腐るほどあります。

言いながら机と椅子、団子とお茶を作りだす。

まあ実際に食べたりするわけじゃないけど味は分かりますからね。

「……………なるほどこんな応用の仕方もあるか」

私とイタチさんは椅子に腰かけた。

「まあ 先ほども言いましたけど久しぶりですね」

「そうだな」

「では、報告を ダンゾウの動きは特にありませんけどサスケは先の中忍試験で大蛇丸に呪印なるものを刻まれたらしいです」

「そうか、しかし大蛇丸の呪印か……………なかなか厄介だな」

「そうなんですか？ まあ私の分かるのはそれくらいです。三代目も健在ですからまあ問題を起こさなければ問題ないと思いますよ。

五代目も大蛇丸以外の伝説の三忍の自来也様か綱手様でしょうし」

「そうか」

さて、二人とも茶を飲み終わったので終わりにしますが、

「では、解きますので これ以上戦闘はきつという演技をお互いしましょう」

「ああ、そうだな」

私は月詠を解いた。

解いた瞬間私は水の上で片膝をついた。
イタチさんは少し体制を崩し肩で息をしている。

「おや、イタチさん何が会ったんですか？ 彼が来た瞬間疲労し始めたようですが」

「来た瞬間に幻術空間に引きずり込まれた」

「おやおや、あちらの様子を見る限りあなたの方が優勢だったみたいですけど倒し切れはしなかったと、あの若さで大したものですよ。それにあなたと同じ眼、彼が木ノ葉の異端の神童ですか？」

「そうだ。退くぞ、これ以上は危険だ」

「仕方がありませんね」

イタチさんが言い鬼鮫が答えると二人は一瞬で消えた。

あの後私はもう一度病院に押し込まれハナビとコク先生とヒアシさんに怒られた。

余談ですけどお見舞いに来た三代目に私が上忍、ハナビが中忍になったことが伝えられた。

・・・・・・退院したら任務が大変そうですね

第十九話（前書き）

すごい久しぶりの投稿です。

そのため口調などおかしい点があるかも知れませんが、それは後々修正します。

第十九話

「さてお主の大蛇丸との戦闘で使った力じゃがあれはなんじゃ？」

現在私は三代目と相談役でしたっけ？の2人とダンゾウと向かい話し合っています。

内容は私が大蛇丸との戦闘で使った炎など、

「そうですね。」

では火影様達は私が生まれた時なんて言われたか知っていますか？」

「生まれながらに写輪眼を開眼させた鬼才だったかの？」

「はい。」

ですがそれには一部違いがあります」

「なに？」

「私が開眼させたのはただの写輪眼ではなく万華鏡写輪眼です」

「「「「な!?!?!」」」」

4人が驚愕していますね。

まあ当然ですが、

「さて、万華鏡は開眼には条件があつたはずだが？」

ダンゾウがそう聞いてきました。

まあ当然効きますよね。

「これは仮説ですが聞いた話では万華鏡の開眼条件は最も親しい者を殺すこと、

私の母は私を身ごもった時点で産もうが産むまいが死ぬのが決定されました。

これはある意味私が殺したと言えませんか？」

「ま、まてナナミそれは違うぞ」

三代目があわてて行ってきました。

三代目らしいですね子供の私に親殺しをしたと思わせたくないんでしょう。

「いえおそらくこれが正解でしょう。

そして母体で開眼させた私は肉体が万華鏡になじんだのか失明の心配が無くなりました」

「……!?!?」「……」

「私から言えるのはこれぐらいです下がってもよろしいですか？」

「うむ」

「ああ、そうそう」

一応これだけ言っておきましょう。

暗殺されはしませんけど命を狙われるのはめんどろですから、

「あなた方がイタチさんを使ってうちは一族を皆殺しにしたのにたいて私は何とも思っていないですよ」

「……!?!?」「……」

後ろから息をのむ音が聞こえますけど気にしません。

「だって父が死んだ後私と接したうちは一族の人間はイタチさんだけでしたし、

うちは一族はクーデターをたくらんでいました。

うちは一族がいかにも優れているようにと木ノ葉を敵に回しては大打撃を与えて滅びるのが目に見えてました。

そうなれば木ノ葉も滅んだ可能性がありましたから皆殺しは最善であり当然だと思っています」

私はそう言い残すとその場を去った。

「どう思うっ？」

ナナミが去った後三代目達は話し合っていた。

「うちの真実を知り、かつそれをワシらに教えてきたのは裏切るつもりはないと言っことを証明するためじゃろうな」

「とりあえずは放置で大丈夫じゃろ、

いくら年とはいええ火影であるお主に気づかれない速度で二代目と初代を殺したのじゃ復讐をしようと思えばいつでもできた」

「加えて殺そうとすれば被害は甚大になるだろうしの」

こうして結局ナナミは放置となったがこの時ダンゾウは別の事を考えていた。

（うちはナナミか、

5代目は綱手になりヒルゼンが生きている以上ワシが火影になるのは不可能に近いだろう。

6代目もヒルゼンの意思を継いだ甘い者になるぐらいならうちは

一族の人間だが一族を皆殺しにされながらもそれを最善であり当然だと思っ
ていますと言えるナナミを6代目に据えた方がまし
かもしれぬな

第二十話（前書き）

ぐだぐだです。

第二十話

「で、何のご用でしょうか　ダンゾウ殿」
「うむ」

現在ダンゾウさんに呼ばれて向かい合っています。

私は今はうちは一族の為警戒していますがダンゾウのことが嫌いではありません。

原作では色々扱いが酷かったと思いますが組織の人間としては正しく組織には必要だと思っています。

うちは一族虐殺に関しても私は虐殺すると決めた相談役？ とダンゾウさんが正しくそれを反対した三代目が間違っていると思っている。

……まあその甘さに助けられているだろう今の身では言えたことではないんでしょうけど、

そう言えば原作ではどうなるんでしょう。

あれですかね？　忍連合？　を組んだからその後は各郷どうし友好になり平和になるんでしょうか？

けどそれは無理ですよ。

だって忍は国の武力ですから戦争とか決めるのは忍のトップの影ではなく大名ですし、

そうなるかと木ノ葉大丈夫なですかね？

やっぱり7代目あるいは8代目火影にはナルトがなるんでしょうか
どれくらいことばかりじゃムリです。

ナルトと似たような年齢もしくはカカシさんよりも若い人でダンゾウさんのようなことが出来そうなのはシカマルくらいでしょうか？
シノも出来そうですね。

まあ原作の登場人物だと同期ぐらいしかあまり書かれませんが、出て居ないだけで出来る人物もいるんでしょうけど、

そう考えるとダンゾウさんって死ぬとかなり困りますね。

漫画ならサスケと和解、ナルト火影で終わりで良いですけど、

この世界で生きている以上未来は不安で無い方が良いです。

まあ普通にサスケをおとがめなしは無理ですよ。

犯罪者集団に所属していて八尾の人柱力を襲いその際に他里の忍を殺していますから、

は、大丈夫なんでしょうが未来は、

……あんまり考えないことにしましょう。

「お主は今の木ノ葉をそして三代目をどうもっ？」

「は、」

「何一族を皆殺しにされながらそれを肯定したお主の意見を聞いてみたくてな」

「そうですね　まず火影様は甘すぎですね」

「ほっ」

？　何で面白そうなんでしょう？

「甘いのが悪いとは言いませんけど　火影様はそれがすぎます。

大蛇丸にしても以前に殺す機会があったと聞きました。

その時に殺しておけば　今里は無事だったでしょう。

まあ今さらですけど」

「確かにな」

「木ノ葉の里は　良い里だとは思いますがどこちらもぬるいですね。」

まずアカデミーで　攻撃系の忍術どころかチャクラ操作を教えませんから　アカデミーを卒業して下忍になりたてでは　あまり戦力になりません。

今年の新人はほとんどが名家の出身ゆえに各家で教わっていたからそれなりに出来ただけです。

そして木ノ葉は 警戒心が足りません。

いくら今は平和とはいえ戦をするかどうか決めるのは忍で無く大名たち政治家、

忍に戦うつつもりが無くても大名に言われれば戦わざるを得ないそれが 忍ですから」

「違い無い」

笑ってますよダンゾウさんが、
そんなに面白いですかね？

「話はそれだけですか？」

「うむ」

「では失礼します」

本当に私はなんのために呼ばれたんでしょう？

あれですかね答えが気に入らなかつたら消すとか？

けど命の危機とかじゃないんですけどあれですな嫌な予感がします。

ナナミが出て行った後ダンゾウは口元に笑みを浮かべていた。

(ワシほど徹底するわけではないがヒルゼンのように甘くもない。すばらしい人材だな。

このままでは今後の火影もヒルゼンのような甘い人間になって行

くだろう。

綱手も若くは無いがヒルゼンがいる以上どうあってもワシが火影になることはない。

そしてワシはヒルゼンと違い弟子にも恵まれず部下にも火影になれる器の者はいない。

やはりナナミを火影にするべきだな。

うちはと言えど日向に住み日向の姫と許嫁である以上相談役はあまり反対できまい。

そして強硬派のワシも賛成すればうちはかどうかなど関係なくなる。

火影になる器はあるだろうし功績などもナナミはほおっておけば勝手に上げるだろうしな。

そもそも現在木ノ葉にナナミに勝てる忍がいるかも疑わしい。

まったくもってうちはも最後にとんでもない者を産み落としたものだ)

第二十一話

現在私の前には綱手様こと現火影様がいます。

「一応完治だな。」

よくもまああの状態から完治できたものだ」

まあ暗示があるんで当然と言えば当然ですね。

今はナルトが連れてきた五代目火影の綱手様に最後の診察をしてもらっているのだ。

しかし私はそんなことはほおっておいて五代目の額を凝視している。

正確には見て、視て、診て、見切っている。

（構成は全て見切りました。

これが使えるようになれば全力の戦闘時間が増えますね）

そう視ているのは額のマークの術式を会得するため、
これがあると便利ですから、

（ただこれって確か寿命が減るんですけどよね？
やっぱりやめましょうかね）

「今日はここまで」
「ありがとうございます」

現在はヒアシさんと日向流の組み手をしていた頃です。

はつきりって私とヒアシさんが本気で戦うと95%私が勝ちますが日向流で限定すれば技量は互角か視てより深くまで理解している私の方が上ですがヒアシさんは物心付く前から日向流の鍛錬をしていたため経験が圧倒的に上のため日向流の組み手では勝率は4割程度です。

余談ですけど95%の残りの5%は戦闘経験の差などによる敗北の可能性です。

まあこの勝率も全力を出さない。万華鏡写輪眼を使わない状態です。ですからこの2つがありなら99.9%でしょうか？
物事に絶対や100%なんでありえませんかからね。

まあ神なら出来るんでしょうけど、

「父上、ナナミさん」

「ん？ どうかしたかハナビ」

「はい。私とナナミさんに任務が」

「私は病み上がりなんですけど」

「仕方があるまい今の木ノ葉はたいへんなのだから」

「そうですね」

原作でもあつたような気がしますけど木ノ葉崩しの後は下忍以外の忍は大変なんですよね。

……私まだ下忍がよかったです。

「任務は私、ナナミさん、コク先生で行うようです。」

「なので集合場所はいつものところだそうです」

「分かりました」

どうやら私もハナビもサスケ救出作戦には不参加ですね。

それにしても五代目は甘いですね。

いくら下忍とは言え自身の意思で抜けたら抜忍として始末でしょうに、

一度自分の意思で抜けようとしたんですから連れ戻せたとしてまた抜ける可能性があるでしょうに、

まそんなことよりも久しぶりの任務ですから組み手で確認したところ動きは鈍って無かったとはいえ油断はいけませんね。

第二十二話（前書き）

いろいろと短いです。

第二十二話

「いました」

現在は任務中です。

内容は忍の始末、

現在木ノ葉は力が衰えていないと示すために多数の依頼を受けていますが現在の状況がそれだけでは許しません。

いかに情報を規制しようともあれほどの出来ごとを隠すことは出来ず、

まあ中忍試験は他の国のお偉いさん達も来ていましたししようがないんですけど、

そのためどれだけ弱ったかなどを探りに来た忍もいるわけでそれを消しに来ています。

そしてターゲットは所属不明の5人の忍です。

「所属を明らかにするのは ありません」

まあ当然ですね。

これで褐色肌だと分かりやすいんですけど、

いえ決めつけはいけませんね木ノ葉にはいませんけど別に雷の国だけってわけじゃないですし、

逆にそれを利用してくる可能性もありますし、

「だろうな、

今回は拷問なんかしないから捉える必要はない確実に始末するぞ、割り当ては俺とナナミが2人、ハナビが1人だ」

「いえ　奇襲で1人速攻でけます」
「分かった。
じゃあ開始」

「があ!？」

「虚刀流　『蒲公英』」

私は敵にばれず背後から貫手で敵の内1名の心臓を貫いた。
まあ唯の貫手ではなく爪合わせで爪をとがらせチャクラで強化したんですけど、

「まず　1人」

私が言うと同時に4人は私に攻撃しようとしたが、

「八卦掌回天」

私が回天で吹き飛ばすと、

「土遁・土柱槍!
火遁・豪火球!」
「はっ」

吹き飛ばした相手は1人は岩の槍に貫かれ、1人は炎の球に燃やされ、1人はチャクラを籠めた掌底で心停止させられ死んだ。
そして最後の一人も、

「天照」

黒い炎に包まれて死んだ。

この2人にはもう万華鏡写輪眼話しているんで普通に使えます。

「終わりましたね」

「そうですね」

「いや、まだ終わってないぞ」

「「は？」」

「まだ2つ任務があるから」

そうですね。今木ノ葉大変ですもんね。

皆任務にかりだされてますもんね。

私達もですよ。

……大蛇丸を次あつたら殺しましょう。

はあ、休みが欲しいです。

第二十三話

「……………先生次で最後でしたよね」

「ああ」

「お風呂、お風呂、お風呂」

「ようやく終わる。」

「ああお風呂」

「……………お前ら3日ぐらい前からそればっかだな」

木ノ葉を出てから10日が経ちました。

その間任務は3つの任務を終えました。

宿などにもその間泊まらず最後に水浴びをしたのも7日前、
忍だからしょうがないですよ。

けどお風呂に入りたいです。

お風呂はリリンが生み出した文化の極みです。

それにしても日向宗家のご令嬢にこんな任務を当てた木ノ葉上層部
部をある意味尊敬します。

「早く終わらせましょう。」

先生、ナナミさんそしてお風呂に」

「ええまったくです」

「……………お前らどんだけ風呂に入りたいんだよ」

「白眼で確認しました。」

事前情報通り山賊は15名です」

「まあ忍術を使えるかどうかはわかりませんが事前情報では一度もそう言うのは見られなかったので問題ないでしょう」

「そうかじゃあ始めるか」

「いえ先生この人数ですから私1人で速攻で終わらせます。そう速攻で」

ナナミが笑みを浮かべながら言うとコクは引きつった笑みを浮かべながら答えた。

「そ、そうか」

(そんなに早く風呂に入りたいのか)

「では忍法巻菱指弾」

ナナミは巻菱で山賊の内の1人を殺すと、

「飛雷神の術」

巻菱につけておいた目印へと飛び残りの14人の山賊を山賊が自分たちが死んだことさえ理解できない速度で殺すとハナビとコクの元へ飛雷神の術で戻ってきた。

「さあ早く帰りましょう」

「そうですね。」

早く帰りましょう」

(ほんとナナミって出鱈目な。

今の四代目の術じゃん)

ナナミ達3人は木ノ葉に急いで戻った。

（サスケ奪還はたぶん終わってますね。

まあ抜け忍になった以上あつたら殺すだけですな。

それでも殺すのは出来れば万華鏡になつてからの方が後々の事を考えると良いですね）

第二十四話

任務から返ってきました。

早くお風呂に入りたいです。

そうそうナルトに会うと謝れました。

なんでもサスケを連れ戻せなかったと、

ぶつちやけどうでもいいんですけど、

まあ空気を読んで気にしないでくださいとだけ言っておきました。それにしてもサスケ奪還が終わったとなるとあと2年でしたっけ

? で第二部ですね。

確か我愛羅が風影でサソリとデイダラにさらわれて、ナルト達が助けに行つて。サソリを殺したけど我愛羅は死んじゃって砂の御意見番? が蘇らせる代わりに死んじゃって、サソリから聞いた情報で大蛇丸の所に行つてサスケに会つて、暁の不死コンビにアスマさんが殺されてそのコンビをナルトとシカマルがそれぞれ殺してサスケが大蛇丸を殺して蛇? とかい組織を作つてイタチを殺して虐殺の真実をマダラから聞いて組織の名前を鷹に変えて暁と協力関係? になつて、八尾の人柱力を襲つて人柱力は死んだふりしてペインが木ノ葉襲つて、ダンゾウが六代目火影になつて五影会議が行われてサスケがそこを襲つてダンゾウがサスケに殺されて、サスケとナルトがあつて忍連合が出来るでしたっけ?

なんかところどころ抜けてる気がしますね。

まあ私に関係あるのはペインが木ノ葉を襲うのと忍連合VS暁くらいですね。

サスケよりはイタチさんに生きていてもらいたいですけど私は関われなさそうですし本人がサスケに殺されたいなら私が無理に関わ

る必要もないですからね。

さあ早くお風呂に入りましょう。

なんでこうなったんでしょ。

「／／／」

なんで私がお風呂に入ってきたらハナビがタオルを巻いているとは言え入ってきたんでしょ。

「／／／」

(気まずい。 気まずい。 気まずいです)

私はどうすればいいんでしょう。

もうハナビが入ってから40分以上たってます。

……出るタイミングを失いましたね。

襲う？

……って違います。

やばいですね。

のぼせてきました。ここで倒れたら大変なことになる気がします。そんなことを考えていると後ろからゴソツと言う音が聞こえました。

結果から言えばハナビはのぼせて気を失いました。

ハナビをどうしようと思っっているとヒナタが返ってきたので頼みました。

あ、ヒアシさんもヒナタも出かけてたんです。

頼んだ時色々誤解されかけましたけど必死に誤解を解きました。

そのときハナビちゃん大胆だな私もこれくらいしなきゃと言っていました。

……ナルト頑張ってください。

あれ？ ヒナタはナルトがすきなんでしょうか？ ネジと仲が良
いんですけど、

まあ私には関係ないですね。

さてあんな騒動がありハナビと少々気ままずくなりましたけど大規模任務にかりだされることになりました。

それは音の里殲滅作戦です。

音の里は大蛇丸の里で大蛇丸によって成り立っていました。

そして大蛇丸が消え音の里は里としての機能が維持出来ていなくなっています。

おそらく大蛇丸は場所の知られている音の里はもう必要ないと判断したんでしょう。

そして里として機能しなくなり略奪すらし始めたため田の里の大名が木ノ葉に依頼し木ノ葉はそれを受諾、

まあ木ノ葉はあれ以降大蛇丸の隠れ処を探し見つけければ潰していいましたけど音の里は場所が明らかになっても明らかになっ
てい
るために場所が他国では手の出しようが無かったのでちょうどよか

ったのでしよう、

これで大蛇丸の手掛かりが見つかったらまた面倒になりますね。

まあ手掛かりから探すのは暗部の仕事ですけど、

第二十五話（前書き）

久しぶりの更新です。
作戦名の割に短いです。

第二十五話

「大したことないですね」

大したことが無いそれが私の音の里殲滅戦で現在戦っている者たちへの感想。

現在は木ノ葉によるお音の里殲滅作戦中ですが大蛇丸が作った里と言うこともあり参加する忍びは全員ある一定以上の力量を持っており医療班などの後方支援も完璧なんです。がこれなら必要ありませんでした。

その気になれば私一人で潰せます。

なぜなら向かってくる敵が下忍か中忍クラスだけ、たまに呪印を持って状態2の奴がいるんですけど理性が殆ど残ってないです。

おそらく大蛇丸が音の里が襲撃されるのを予想して使える者は他の基地に移したんでしょう。あ、たまに中忍試験にできた・・・・名前なんて言いましたっけ？あれです腕を改造して風遁みたいに風を起こしてたやつみたいな忍びは出てきましたね。

「じゃま」

私は目の前に現れた敵に対して腕を振るい首を切り落とした。

「本当に大したことないけど　面倒ですね」

そうそう今回の作戦ですけど殲滅が目的ですけど他にも大蛇丸の他の基地に関する情報の入手です。あと基地をあさり終わったらこ

の本拠地と思われる建物は破壊するそうです。

あと実験台にされている被害者がいたら保護なんですけどこれが面倒です

現在3人保護していますけど影分身を2体出して1体に1人ずつ担がせてます。

「はあ 本当に面倒」

ナナミの目の前に5人の呪印を持った忍びが現れた。

「って 獣ですか？」

その5人が現れた瞬間影分身共々腕を振るい葬った。

「はあ 戦闘を楽しむのはあれですけど規模に比べて拍子抜けするぐらい簡単な任務ですね」

そんなことを考えているうちに合流地点に到達しました。

「コク先生3名を保護しました」

「おっし、じゃあ医療部隊に引き待たしてくれ」

「はい。」

けど 外れでしたね」

「ああ、目立った人物もいなかった。

おそらくこの後調べに調べて大蛇丸の足取りを追うんだらうけど、まっ殆ど無駄になるだらうな」

「はあ 面倒です」

こうして音の里殲滅作戦は規模に反してあっけなく終わった。

第二十六話

「Why?」

「は？ わ、なんだ？ 雲隠れでつかられてる他の大陸の言葉か？」

あ、思わず記憶が薄くなってきた転生前の知識から英語で言ってしまうました。

あ、この世界他の他の大陸あるそうですねよ。

まあ原作だと出ないで終わりでしょうけど、交流も殆ど無いですし、

原作と言えば雪の国に行きました。

はい。任務です。映画でナルト達が受けた任務をやらされました。ラスボスの……ラスボスさんは普通に倒せました。チャクラ吸収の鎧といっても千鳥と螺旋丸で壊れる程度の代物ですし、危なげなく終わりました。

これは番外編で語られるかもしれませんが、たぶん、

……はっ電波が!?

閑話休題。

今はそんなことどうでもいいんです。

私は音の里殲滅作戦からしばらくたちあと1年ぐらいでナルトが帰ってきて暁が動くな〜と縁側でハナビとお茶をしていたところコク先生に呼び出され意味不明な事を言われました。

「すみません。もう一度言ってください。コク先生」

「だからうちは ナナミを今度のアカデミー卒業生の担当上忍に任命する。これは任務だ」

「コク先生　上層部は馬鹿ですか？」

私は上忍ですけど同時にまだ1年しかたつてない新人ですよ。あ、新しい新人が入りますから新人ではありませんか？」

「どうでもいいだろ、それに任務だ拒否権なんてないぞ」

「は、分かりました。」

上忍うちは　ナナミ任務　拝命しました」

「さて、何でナナミなのかね」

コクはナナミに任務を告げたあと自宅に帰り考えていた。

（ナナミは強い。）

おそらくうちは歴史でも勝てるのはマダラぐらいだろ、現在の木ノ葉じゃ間違いなく最強だ。

それにナナミは幻術、体術、忍術全てがトップクラスってか最強で教えるのもうまい。担当上忍には最適だろう。幻術、体術、忍術全て最高クラスの物を教えることが出来るのだから、

ただナナミも言った手通りまだナナミは忍になって1年足らず、その上今の木ノ葉ではナナミを担当上忍につけるのはきついはず。さ、どうしてかね）

コクは考えていると1つ思いついた。

（ダンゾウのおっさんが関わってるのかね？

あのおっさん5代目をよく思っていないし、それは自分が火影になりたいとかじゃなくて5代目が甘いからだし、

次の綱手様も見た目若いけど50代だし次の火影は以外とすぐ出るでしょ。その候補は……カカシ先輩か？ けどそれだと三代目同様甘い4代目の教えを受けた者になるから危惧するかもしれない。実際カカシ先輩暗部いたわりに甘い所あるし、
対してナナミは甘く無い。

音の里殲滅戦で攻撃してきた5歳ぐらいの子供を躊躇なく眉ひとつ動かさず平然と殺してたし、ナナミは必要とあれば犠牲は仕方がないと考えるだろう。まあハナビとかナナミが大切と思ってるものだとかわからないが少なくとも3代目達よりは甘く無い。

だから今の内に担当上忍をやらせておいて火影に推薦しやすくしたのか？

別に火影が担当上忍をしたことが無ければならないなんて規則は無いが教え子を持って、そのものが優秀な方が大名の受けもいいだろうし)

コクはため息をつくとお茶をすすった。

(ナナミも大変なことになりそうだな。

まあ一応教え子だから何かあつたら守らないとな、

……あれ？ ナナミが誰かに守られる状況を想像できない。ナナミなら5影に囲まれても普通に生還出来そうだし、てかナナミがピンチの状況とか俺助けられなくね？

いや、戦闘面以外なら、

……出来ればいいな、

まあピンチなんて陥らなければいんだけどな)

コクは若干沈みながらそんなことを考えていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1700/>

NARUTO 転生して最強のうちはになりました？

2011年7月31日02時38分発行